



# 月報 岡崎の教育

9月号

平成4年9月1日  
発行/編集  
岡崎市教育委員会

「うさぎさん、わたしのたんぼぼだよ」  
みずみずしいたんぼぼを  
にっこりして差し出す  
小刻みに動く口を、じつと見つめる  
冒険するあなたを見守る  
お母さんのように

「うさぎさんの毛、ふわふわだね」  
そうと子うさぎを抱く  
胸の中に包み込んで  
その温もりを逃さない  
心傷ついたあなたを受け止める  
お母さんのように

触れる手がやさしいね  
温かな心なんだね  
なかよしになりたいね

「あしたも遊ぼうね」  
与える喜び  
触れ合う喜び  
あなたの見つめる目が輝いている

〈触れ合う喜び〉



(うさぎとの触れ合い - 男川小)

縁あって、この四月に本宿の丘陵に新設された短期大学の学長をお引受けした私は、岡崎市役所に近い乙川の畔に居をとった。窓下に眺められるこの川は、古都にふさわしいしっとりとした趣とゆるやかな流れで心を落着かせてくれるばかりでなく、陽春には爛漫たる装いを見せた桜がいまは霖雨に煙った濃い緑陰を岸辺の道に落とし、ところどころに咲き乱れる紫陽花も散策の楽しみを与えてくれる。

## — 教育随想 — 乙川の畔にて

岡崎学園国際短期大学長  
中 埜 肇



しかし、おそらく私が入居する以前からここを住居としていたであろう雌雄と思われる二羽だけは、いまなお曉震から日没まで網の外にとまって、時折り鳴声をたてては、侵略者である私の方を恨めし気に見ている。私は時にその凝視に堪えないこともある。かくてわが家は「乙鳩居」となった次第である。

書簡の端に「乙鳩居」と書いたところ、篤学の彼女は、岡崎のことを全く知らないうちにもあって、これが私の悪戯めいた命名であるとはさらに思わず、自分に対する知的な挑戦と受けとって、真剣に各種の文献を渉猟した。そのあげく、「鳩居」は中国の古典に「仮住まい」の意味で使われることがあり、「乙」には「しやれた情趣」という感覚がこめられてい

拙宅は高層集合住宅の中にあるが、現代日本の巷に氾濫するカタカナの洪水（これは国際化とは全く関係がない）に閉口している私は、この住宅に付けられた仏蘭西風の名前に辟易して、寓居をひそかに「乙鳩居」と呼んでいる。「乙」は言うまでもなく明媚な乙川を指す。しかもどういうわけか、このあたりには鳩が群棲している。拙宅ではこの鳥どももたらず公害を慮って、露台上に網を張った。

るから、「乙鳩居」は「しやれた借家」の意であろうと注解してくれた。これはまたまことに思いもかけない高邁な解釈である。こういう身に余る誤解を得たことを、私はいまむしる満腔の謝意をもって受けとめている。

とはいっても、このような命名はとかく老人が陥りがちな似而非文人趣味であると、本格的な漢学研究者からは嘲侮されるかもしれない。しかし現代日本に横行するカタカナかぶれにはつい反撥してみたくもなるのである。これも時代遅れの頑冥固陋のなせる業であろうか。ついでながら、東京近郊の旧宅を私は「肆美庵」と称した。「肆」は普通で、「四」と同義である。この家からは、よく晴れた風の強い冬の朝富士の麗姿が望まれる。またそういう日の黄昏には茜色の西空を背に黒富士も見える。反対側を向けば、筑波山も眺められる。これが第一の美である。高層にあるため、近隣の夜景が美しいばかりか、江戸川を隔てて東京の灯が瞬き、夏の夜には遠近の花火が楽しめる。これが第二である。第三に、拙宅に接して由緒ある古刹があって、春秋にはその境内を飾る桜花と紅葉を居ながらにして楽しめる。最後に、長雨の季節には近くの丘阜が煙のように霞んで、宛然として中国の水墨画の趣を呈する。これが「肆美庵」なる呼称の由来である。私はいま乙鳩居と肆美庵の二つを往来して人生の残照を楽しんでいる。

(なかの はじめ)

## 羅針盤



瓢箪と般若心経

大門小学校長

中尾 劍一

私の最近の趣味は、瓢箪作りで、それに「般若心経」を書くことである。身近な人は知っていて、瓢箪に関する物を捜してきては、私に贈ってくれる奇特な人もいる。

瓢箪作りをしようと思った切っ掛けは、近くの長老が瓢箪作りに生きがいを感じ、年を忘れて栽培している姿を見たことである。また、ぶらりと垂れ下がったユーモラスな形に、なぜか親しみを感じたからである。

「般若心経」を書くようになったのは、年を取ったせいとか、仏心が出たのであろう。「般若心経」は、日本で一番多く読まれている経典ということと、お経が三百字足らずで手頃だからである。先年度は約百個の瓢箪に書き上げた。昨年十一月、全日本愛瓢会愛知大会に出品して銅賞をもらい、それを契機に全日本愛瓢会にも入会した。今年、五月に滋賀県長浜市での全国大会に出席し、

ふるさとシリーズ

## この人に聞く



## 華道栄心流家元

清水 栄芯 氏

華道栄心流の家元である清水栄芯さんを羽根北町の自宅に訪問した。植物園のような庭を配したそのお宅は、まるで花園の中に建つようでもある。緑のアーケードをくぐって玄関に入ると、カサブランカの大輪とともに栄芯さんと御主人は私たちにこやかに迎えて下さった。

昭和四十年一月に「華道栄心流」を創流された栄芯さんの華道歴は五十年を越えるが、生け花との出会いを次のように話して下さい。

「小学校一年のときに母を亡くしましたが、花好きの母は、時折私を花摘みに連れていってくれました。初めて生け

花に接したのは小学校三年の時ですね。神社に奉納された生け花を見て、子供ながらにその美しさにひかれました。」

その後、栄芯さんの華道への精進が始まったわけである。

「初めは花も自分で山から取ってきまして。はさみも良いものはありませんでしたので、砥石で研いだり、剣山も自分で工夫して作りましたね。草花についてはとにかくいろいろな本を読んで調べましたよ。」

道を極めることへの熱意と努力を惜しまない姿勢は、子供のころから今も変わっていない。

「花は素直ですよ。一生懸命世話をすれば、美しい花を咲かせて見せてくれる。庭には二百種以上の花がありますが、

「次はあなたの番よ」と話しかけてあげるんです。そうすると、次の華展のときには見事な花を咲かせてくれます。花もどう使われるかで幸せが決まるのだと思いますね。人と同じで適材適所で生かされているのではないですか。」

庭の花を生け花に添えられる栄芯さん。花に寄り添い、花と語り、花の命を見つめてみえる栄芯さんの心が伝わる言葉である。

京都夏季華道大学理事をはじめ、国内の華展は年に数十回、そしてモスクワ、ロサンゼルス、パリなどでの海外華展も開かれたという多彩な華歴をお持ちの栄芯さんだが、お弟子さんの稽古のほかにも古屋の女子高校へも礼法指導に三十数年

行ってみえるということである。

「自分が幸せになるには相手を幸せにすることです。人が生きてきた慣習の中で大切にされてきたものを茶華道を通してまず形から教えます。いつも生徒たちの母親になろうという気持ちでいます。どんな悪い子でも一人では良い子です。決してだめということは言いませんね。話をするたびに子供たちは変わってきますよ。」

創流三十周年を迎えようとする栄心流はこれからますます飛躍が期待されている。

お茶室を渡る涼しい風と栄芯さんの凜としたお人柄に、すがすがしく満ちたりた気持ちになった真夏の午後であった。

氏 名 しみず えいしん

生年月日 昭和九年八月十日

住 所 岡崎市羽根北町二・三・十三



作品のすばらしさに目を見張るものがあり、ますます意欲が出てきた。

現在、大瓢箪が四十五個、中瓢箪が二十個、千成瓢箪が三百個なっている。しかし、ここまでが大変であった。振り返ってみる。まず、土作りであるが、冬の寒い時期から耕し、牛糞、草木の灰、こぬか等を混ぜ合わせ、発酵薬品をまき、ビニルで覆っておくのである。

次に、棚づくりである。二メートルぐらゐの鉄骨のもので、知人に作ってもらった。苗は、注文したり、自分で蒔いたりしたが、三月で霜が降りる心配があるので、ビニルで覆った。苗が大きくなると害虫が寄り付いてくるので、たびたび消毒をした。梅雨時は、ウドン粉病、べト病、炭素病、黒点病になり、これまた消毒が必要になってくる。

朝、早く起きて瓢箪畑を見回るのが日課となり、子育てと同じように愛情込めて育てている。一番大きな瓢箪は、周りが一メートル六センチメートルもある。私の腹より六センチメートルも太い大瓢箪を眺めている。

どれもこれも、一癖も二癖もありそうな瓢箪ばかりで、一律じゃない。個性をみんな主張している。思わず尻をなでてやりたい瓢箪もあれば、生意気な格好をしているのもある。そんな瓢箪たちに、私はとりこになってしまった。

あと一か月も過ぎると、水漬け、種出し、乾燥、加工など、秋の夜長を意義ある日々として送りたいものである。



# 今に生きる家康

▲ 1年生から全員が言える家康公遺訓と「家康を超えよ」の石碑（大樹寺小）



▲ 「家康の一生」を日本的な音楽で表現（梅園小）



▲ 自立の日の野外劇「家康の自立」(大樹寺小)



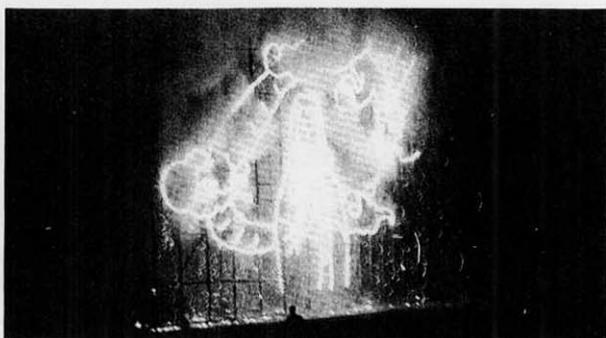
▲ 伝承文化クラブで取り組む五万石太鼓（連尺小）



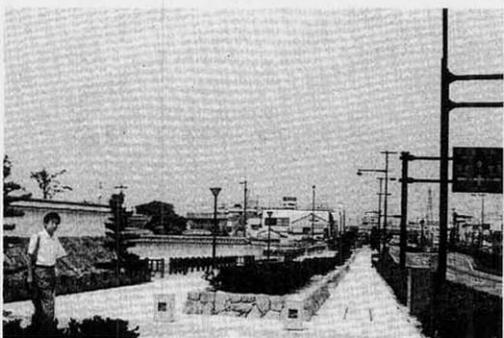
▲ 文化祭での劇、家康の母「於大の方」(南中)



▲ 石都岡崎ならではの総花岡石張り道路（大樹寺前）



▲ 家康公生誕450年祭記念の大仕掛け花火「家康の一生」



▲ 城壁が完成し、一段と立派になった岡崎公園



▲ 観光客でにぎわう三河武士のやかた家康館

今年、家康公生誕四百五十年にあたる。三月の桜まつりを皮切りに、家康公の誕生日十二月二十六日まで、様々な行事や催しが華々しく繰り広げられている。

「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し……」あまりにも有名な言葉であるが、現在においても十分通用する言葉である。この遺訓をはじめとして、現在の岡崎には、まだまだ家康公とかかわりのあることや物がたくさん存在している。

大樹寺小学校では、校庭に「家康を超えよ」の石碑や「家康公遺訓」、「家康の像」が据えられ、月一回の「自立の時間」には全校児童が遺訓を暗誦している。

また、歴史学習で調べた「家康の一生」をイメージして子供たちに作曲させた学校もある。グループごとに担当箇所を決め、ゆかりの地を訪ねたり、本で調べたりした上で、アンサンブルオルガンやシンセサイザーを用いて、日本的な音楽で家康を表現しようと取り組んだのである。

このほか、文化祭で家康をテーマに演劇をしている学校や、伝承文化クラブとして五万石太鼓を取り上げ、家康の心を引継いでいる学校もある。こういう様々な活動の中に、岡崎が生んだ英傑、家康公は今に生き続けている。



▲ 家康の像（大樹寺小）



▲ 家康公遺訓（岡崎公園）



▲ 竹千代の像（連尺小）



## アンコール・コンサート

小豆坂小 三浦 裕昌

四年二組最後の授業参観で、前から決めてあった音楽の授業を終えると、数人の母親から、「先生、もう一回やって。私たちが見んなに呼びかけるから。」と、びつくりするような授業参観のアンコールが出た。その土曜日、参観ではなくコンサートを開いた。父母に限らず、一家で来てくれた人もいた。

子供たちが自分たちで編曲工夫した「となりのトトロ」などの歌や演奏が続き、いよいよ最後の「魔法の鈴」を迎えた。「魔法の鈴」は、モーツァルトの歌劇「魔笛」の一部をふくら

ませたオペラで、学芸会のために、オリジナルにクラスで作りに上げてきたものである。だからクラス中の子供一人一つ、全部で三十五のソング歌詞があり、自分の声を生かす役がある。

I男は高い音がよく出るので、初めのソロを受け持つことにした。Y子は、ポリリウムがないのを気にしていたので、静かな場面を、きちんと歌う役をすることにした。それでも家で暇があると、鏡を見ながらうるさいぐらい歌っていたそうである。

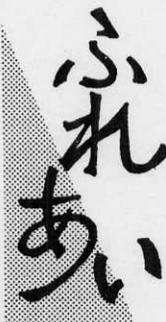
T子は、これといって特徴がない子だったが、音楽教室に通っていた。そこで、「変わるかな」と思って、伴奏の鉄琴をたたかせた。思っていた以上に、楽譜を読んで見事に合わせていく。「すごいね!」とほめてやると、にこっとし、音楽は、自信がついたT子の、一番得意な教科になった。

こうして、みんなで作ってきた「魔法の鈴」は、クラスのシンボルになった。オペラの最後に合唱するのは、みんなで作った学級歌である。

目頭を押えるお母さん。子供たちは、いつも一生懸命、精一杯歌ってきた。子供自身にその自信もある。だから、音楽をす

るときは、実に堂々としている。

学芸会でも、授業参観でも、一生懸命な子供の姿が、多くの人の感動を呼び、子供をより輝かせ、その結果、授業参観のアンコールコンサートとなったのだと思う。一人ひとりを生かすことが、まちがいはなく子供を愛するのだと、確認できた一年であった。



## 師弟一体の輝き

六ツ美北中 山田 茂

「ヨイ、ドン!」

「先生、遅いよ。もっと速く。」

「先生、もう年だで無理せん方がいよ。」

清掃時に私と一緒に雑巾がけをしている生徒の声である。なんともきつい言葉であるが、そ

の中に温かさを感じる。

四月、新設校である六ツ美北中での生活が始まった。何もかもが新しいものづくめの中で、一階ホールの清掃担当となったこのホールは、生徒用昇降口に面し、約六百平方メートルある、いわば「六ツ美北中の顔」といわれる場所である。ホールの床をいかにきれいに保つかが私の使命のように思われた。

ホールの清掃はほうきと雑巾で行うが、昇降口があるため、毎日砂ぼりこりととの戦いである。ほうきでしっかりと掃いたつもりでも、床全体が白く見える。雑巾でふくと何本ものしま模様が出てしまう。

「先生、やっても無駄だよ。」  
「何度やっても同じだよ。」

初めのうちは真剣に清掃していた生徒たちも、なかなかきれいにならないので、意欲がうすれかけてきた。そんな折、一緒に雑巾がけをしていた女子が私を追い越した。

「待てえ。先生、待てえ。」  
あわてて追いかけてくる。これだ、と思った。

「今から向こうまで雑巾がけリースをやるぞ。」  
私の呼びかけに生徒は全員集合。その日の清掃は今まで以上

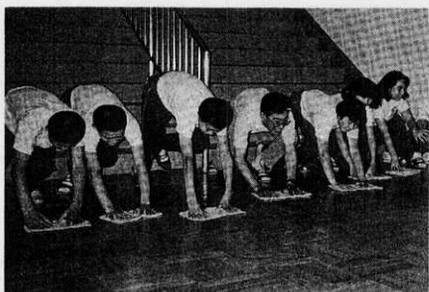
にきつかったが、生徒は生き生きとしていた。

翌日の清掃の時間、生徒は雑巾を片手に私を待っていた。「先生、遅いよ。早く雑巾持つといで。」

十五分間の闘いが始まる。「やったあ。勝ったね。」  
「やだ、先生に負けた。もう一回ね。」

何度も繰り返し返すうちに、床のしま模様が消えてきた。それ以後、雑巾がけリースがホールの清掃の目玉となり、生徒たちもすっかり雑巾がけをするようになった。

教師と一緒に活動する中で、生徒に意欲が出てきた。おかげで一階ホールの床は、校内で一番輝いている。





お知らせ

（通信陸上県大会）

優勝

- ・四百MR女子 矢作北中
- ・共通走り高跳び男子 北浦 武(矢作中)
- ・一年百M女子 鈴木 智実(竜南中)
- ・共通二百M女子 高橋 穂波(矢作北中)

（愛知県総合体育大会）

優勝

- ・バレーボール男子 矢作北中
- ・陸上競技女子総合 矢作北中
- ・陸上競技男子八百MR 南 中
- ・陸上競技男子四百M 伊藤 拓馬(常磐中)
- ・陸上競技男子一年千五百M 林 邦彦(福岡中)
- ・陸上競技男子三千M 高井 淳(東海中)

- ・陸上競技男子走幅跳 服部 和彦(竜南中)
- ・陸上競技女子四百MR 矢作北中

（小編成）

- ・陸上競技女子二百M 高橋 穂波(矢作北中)
- ・陸上競技女子一年百M 鈴木 智実(竜南中)
- ・水泳競技四百MメドレーR 南 中

準優勝

- ・相撲 杉浦 康徳(甲山中)
- ・バレーボール女子 東海中

三位

- ・バレーボール男子 東海中
- ・バレーボール女子 矢作北中
- ・ソフトテニス女子 矢作中
- ・水泳男子総合 南 中

（わんぱく相撲全国大会）

- ・準優勝 片桐 裕策(本宿小)

（愛知県総合体育大会）

- ・第九回NHK杯全国中学校放送コンテスト愛知県大会
- ・朗読部門 入選 原田 祐子(矢作中)
- ・ラジオ番組部門 優良 常磐中学校 矢作中学校
- ・テレビ番組部門 優秀 常磐中学校 優良 矢作中学校

- ・第二十二回県鳥獣保護課発表会 県知事賞 生平小学校
- ・県吹奏楽コンクール地区大会(大編成) 南中学校
- ・金賞 矢作北中学校
- ・金賞 葵中学校

（大編成）

- ・金賞 葵中学校
- ・金賞 六ツ美北中学校

（小編成）

- ・銀賞 南中学校
- ・金賞 葵中学校

（小学校の部）

- ・金賞 竜美丘小学校
- ・金賞 六ツ美北部小学校
- ・銀賞 本宿小学校
- ・銀賞 城南小学校

（中学校の部）

- ・金賞 梅園小学校
- ・金賞 広幡小学校
- ・銀賞 矢作南小学校
- ・銅賞 六名小学校
- ・銅賞 矢作東小学校
- ・銅賞 六ツ美北部小学校

- ・中部日本吹奏楽コンクール県大会(大編成) 南中学校
- ・優秀賞 葵中学校
- ・優秀賞 葵中学校

第45回 岡崎市中学校市長杯総合成績

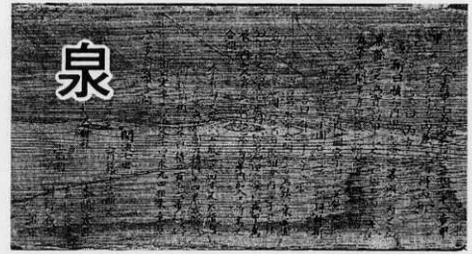
	優勝	2位	3位	4位	5位	6位
男子総合	矢作北	竜海	竜南	新香山	東海	甲山
女子総合	矢作北	矢作	竜南	竜海	葵	新香山
男女総合	矢作北	竜海	竜南	新香山	矢作	甲山

第45回 岡崎市中学校市長杯総合体育大会兼西三河中学校選手権大会岡崎額田支所予選会 競技成績

種目	性別	優勝	2位	3位	4位	5位	6位
陸上競技	男	南	竜海	東海			
	女	矢作北	竜海	海作			
バスケットボール	男	竜海	城北	甲山	新香山		
	女	竜海	幸田北部	六ツ美	葵		
バレーボール	男	矢作北	東海	竜南	幸田北部		
	女	東海	竜南	矢作北	幸田北部		
ソフトテニス	男	常磐	幸田北部	福岡	幸田北部		
	女	矢作	常磐	福岡	幸田北部		
卓球	男	幸田北部	幸田南部	新香山	常磐		
	女	幸田南部	矢作北	新香山	常磐		
体操	男	甲山	竜海	六ツ美			
	女	矢作北	東海	竜南			
新体操	男	甲山	竜海	竜海			
	女	竜海	矢作	矢作北			
剣道	男	矢作北	額田	新香山	六ツ美		
	女	額田	幸田南部	六ツ美	新香山		
ハンドボール	男	葵	幸田	六ツ美			
	女	新香山	北	葵	六ツ美		
軟式野球	男	岩津	竜海	北	矢作北		
	女	矢作	葵	幸田北部	幸田		
ソフトボール	男	竜海	北	竜南			
	女	竜海	新香山	竜南	甲山		
サッカー	男	矢作	新香山	竜南			
	女	南	甲山	南			
水泳	男女	矢作北	甲山	南			

平成4年度 岡崎市小学校球技大会・水泳大会成績

種目	性別	優勝	2位	3位	4位	5位	6位
ソフトボール	男	川	六ツ美南部	六名	連尺		
	女	矢作南	広幡	細川	常磐南		
バレーボール	男	六ツ美南部	上地	大門	北野		
	女	六ツ美北部	矢作南	六ツ美南部	六ツ美中部		
バスケットボール	男	三島	井田	連尺	細川		
	女	広幡	羽根	梅園	竜美丘		
サッカー	男	常磐	上地	羽根	細川		
	女	大樹寺	大門	広幡			
水泳	男	大樹寺	大門	広幡			
	女	広幡	大樹寺	竜美丘			



六所神社蔵



岩津天満宮蔵

## 算額

下の算額は昭和五十八年八月、名古屋市の星野晴美氏より岩津天満宮に奉納されたもので、「数学の発展を祈って」とある。最近では珍しいことで、今も学問の発展を願う心が生き続けている証である。

日本独自に発達した和算は、天文学、暦学、測量術などの発達を促し、数学の問題を木額に書いて神社、仏閣に掲げる算額の風習を生み出した。

算額は、もともと絵馬に難問を記し、自分で探した解決方法を神前に捧げて感謝の意味を表し

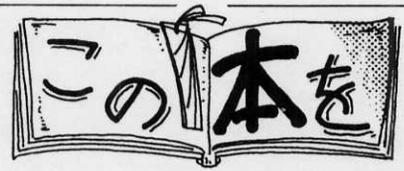
たが、次第に参詣者たちに我が術を問いかけたものだと言われる。それ故に各地の数学家たちは、奉納してある全国の算額を探し、解いて回ったそうである。十七世紀ごろから始まって、全国におよそ五百面が現存する。愛知県は比較的多いということである。

現在、市内の算額は、前述の一面を含め、安永八年（一七七九）六所神社に奉納されたものと、明治四年（一八七一）岩中の岩屋観音に奉納されたものの三点が確認されている。

・表紙写真  
・表紙詩  
・カット

男川小  
男川小  
矢作中

岡本孝幸  
河上咲子  
前野奈津子



*子どもと学校	河合 準雄
岩波新書	¥ 550
*おいしい人間	高峰 秀子
潮出版	¥1300
*元号の選暦	陳 舜臣
中央公論社	¥1200
*日本語根ほり葉ほり	森本 哲郎
新潮社	¥1200

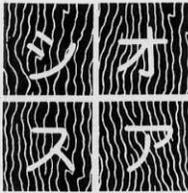
※自分を120%活かす右脳刺激法 品川 嘉也  
丸善メイツ ¥1300

人間の心や精神は、肉体に大きな影響を及ぼす。ストレスが原因で起こる現代病は増加の一途をたどっている。それは左脳の酷使が原因であるという。

右脳に刺激を与え、活用すれば、ストレスは解消し、心はくつろぎ、さらに、閃き・創造の能力をも発揮することができるようになる。それには、クラシック音楽を聞くことが日本人には最適であると、筆者は大脳生理学の立場から説く。右脳刺激法から21世紀への示唆を得る。

岡崎観光夏まつりのよびもの、花火大会の取材を兼ね、ほこ船に乗せてもらった。船の上からの眺めは格別で、真夏の夜空と川面を彩る花火には魅了された。今年、家康公生誕四百五十年祭の記念大会で「家康の一生」の大仕掛けなど、本場三河花火師の技術とアイデアはさすがであった。

身長がぐつと伸びて、一段とたくましさを増した生徒たちを新学期の教室に迎えた。真夏の太陽のエネルギーを満面に吸収して、皆、引き締まったいい顔をしている。彼らの眼に、私はどのように映っただろうか。身長は伸びずとも、瞳の輝きだけは負けたくないものだ。



「あなたの番よ、次は。」

自宅の庭に咲く花に語りかけながら、一枝を切り取り、花瓶に生ける。栄志先生が作品にする材料の花は、自宅の庭のものを使うそうである。約二百種類の花は、来年の作品をイメージして育てられている。花の心をつかむことは人の心をつかむことに通じる。

すばらしい感動のドラマ、バルセロナ・オリンピック。圧巻は、女子二百メートル平泳ぎの優勝者岩崎恭子さんのメッセージ。

「今まで生きてきた中で一番幸せ。」あどけなさの残る中二の少女の一言が多くの人に鮮烈な印象を与え、この夏、世界を駆けめぐった。